

Title	ハミルトン教授の西班牙に於ける価格革命
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.1 (1935. 1) ,p.111- 131
JaLC DOI	10.14991/001.19350101-0111
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350101-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

屢、あるが如き、すべて不満と言へば云へる。然しこれ等の不満は、前記の如きこの書の價值に比して小さいものである。

最後に、この書を手にして吾々の念頭に浮ぶ希望を述べさせて貰へば、本書が社會事業關係の法律を網羅して居ることから、社會事業の研究に關心を有するものは、次の如き希望を抱くのである。即ちこの書の著者の如き人が、社會事業に關する應用科學としての應用法律學を、編み出して呉れたらよいと思ふのである。吾々は一個の技術としての社會事業知識を絶えず欲求して居る。然しそれを得るが爲めには、多種の科學の成果を利用せねばならず、しかもそれを十分になし遂げることは殆ど不可能である。だからさし當つて吾々として痛切に必要とするものは、社會事業に關する諸種の應用科學である。法律學・社會學・心理學・經濟學その他の應用科學が社會事業に對して成立するならば、十分な社會事業知識の形成は或は可能になるかも知れない。社會事業の眞實の進歩は實にその時まで不可能なのである。そこでこの著者の如き法律にも無産者の生活事情にも十分な知識を備へた人が、社會事業に關係ある法律を説明し、過去現在未來に亘つて社會事業と法律との間に存在する關係を闡明して呉れることが最も望ましいのである。(昭和九年十月、章華社版、菊判八二〇頁、四圓八十錢、昭和九年十二月廿三日記)

ハミルトン教授の「西班牙に於ける價格革命」

高 村 象 平

西班牙經濟史に關する外國語文献(西班牙語以外の)若干を私は本誌一昨年九月號に擧げたが、その後その存在を知るを得たものは次の如くである。

- J. Bernays: Zur inneren Entwicklung Castiliens unter Karl V, in: Deutsche Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, Bd. I.
- Julius Moritz Bonn: Spaniens Niedergang während der Preisrevolution des 16. Jahrhunderts. Stuttgart. 1896.
- E. Castelot: Coup d'oeil sur la littérature économique de l'Espagne au XVI^e et XVII^e siècles, in: Journal des Economistes, 5^e Serie, XLV, pp. 189-203.
- Albert Girard: Le Chiffre de la population de l'Espagne dans les temps modernes, in: Revue d'Histoire Moderne, Nov.-Déc. 1928.; Jan.-Feb. 1929.
- Jules Gounon-Loubens: Essai sur l'administration de la Castille au XVI^e siècle. Paris, 1860.
- Goury du Roslan: Essai sur l'histoire économique de l'Espagne, Paris. 1888.

ハミルトン教授の「西班牙に於ける價格革命」

111 (111)

- Earl J. Hamilton: American treasure and Andalusian prices, 1503-1660, in: Journal of Economic and Business History. Vol. I. pp. 1-35.
- Ditto: American treasure and the rise of capitalism (1500-1700), in: *Economica*, Nov. 1929. pp. 338-357.
- Ditto: Wages and subsistence on Spanish treasure ships, 1503-1660, in: Journal of Political Economy, Vol. XXXVII, pp. 430-450.
- Clarence Henry Haring: American gold and silver production in the first half of the sixteenth century, in: Quarterly Journal of Economics. Vol. XXIX. pp. 433-479.
- Alexandre de Humboldt: Essai politique sur le royaume de la Nouvelle-Espagne. Paris. 1811. 2 vols.
- Martin Hume, La cour de Philippe IV et la décadence de l'Espagne. Paris. 1912.
- E. Lévi-Provençal: La vie économique de l'Espagne musulmane au X^e siècle, in: *Revue Historique*. 167. (1931).
- W. Lexis: Beiträge zur Statistik der Edelmetalle, in: *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. XXXIV. S. 361-417.
- H. Lonchay: Recherches sur l'origine et la valeur des ducats et des écus Espagnoles, in: *B. L. Ac. Belgique*. 1906. No. 11.
- Bernard Moses: Economic condition of Spain, 1500-1600, in: *Journal of Political Economy*, Vol. I. pp. 513-534.

Adolf Soether: Edelmetall-Produktion und Werthverhältniss zwischen Gold und Silver seit der Entdeckung Amerikas bis zur Gegenwart. Gotha. 1879.

Georg Wiebe: Zur Geschichte der Preisrevolution des XVI. und XVII. Jahrhunderts. Leipzig. 1895.

加之、近時次の二著が公けられた。

Earl J. Hamilton: American treasure and the price revolution in Spain, 1501-1650. (Harvard Economic Studies 43) Camb., Mass. 1934.

F. A. Kirkpatrick: The Spanish Conquistadores. (The Pioneer Histories.) London. 1934.

本稿はその前者を紹介せんとするものである。ハミルトン教授のこの近著は全然書き下しとすべきことは出来な
 S. O'Sullivan の中の「既刊の四論文」“American treasure and Andalusian prices, 1503-1660”; “Imports
 of American gold and silver into Spain, 1503-1660”; “Monetary inflation in Castile, 1598-1660”; “La
 Monnaie en Castile, 1501-1650.”が收められて居るからである。然しながらそれ等は相當筆を加へられて居るこ
 とを斷つて置かねばならないであらう。それは過去六六年餘に亘る同教授夫妻の飽むことなき・西班牙諸地方に於
 ける原資料探訪の結果生じたところの書き改めであつたのである。教授自ら語るところに據れば、本書の爲めの資
 料探訪に要した時間は夫妻協同にて約三萬七百五十時間、他よりの援助時間約一萬二千五百時間、指數算出の爲め
 の計算回数約三百萬に及ぶといふ。その成果の是非はさて置き、少くともその努力に對して深厚なる敬意を表して
 然るべきであるとは、本書に接した誰人も一様に感ずるところであらう。

本書の取扱ふ主題は、その著書名に示されて居るところである。これはハミルトン教授が目下進捗されて居る西

班牙に於ける一三五二——一八〇〇年の物價・貨銀に関する研究の一部分たるものである。しかもこの老大な研究の中間部分を先づ以つて公けにされたことは決して意義無しとしないであらう。といふのは、周知の如く、メキシコ及びペルウの征服に續いて貴金屬生産は増大し、これは歐羅巴に流入すると共に價格革命を生ぜしめたのであつたが、それは又近世の最初の二世紀に亘つて歐羅巴社會經濟組織の變形に甚だ重要な役割を擔當したものであつた。しかも當時の西班牙カトリック諸王及びハプスブルク王朝は、謂ゆる重商主義を信奉し、Sevilleに新大陸貿易・航海の獨占を賦與し歐羅巴へ注入する金銀の流れはすべて一應この地の Casa de la Contratación (India House) を通すべきことを要求したが故に、價格革命は歐羅巴諸國のうち西班牙に於いてこそ最も急激に且つ甚大に生じたと考へられて居る。然るにこの西班牙の物價及び貨銀に及ぼせる新大陸金銀の影響に就いての正確な數字は未だ殆んど明かにされて居らず、僅かに推測又は第二次的資料に基く推算を以つてこれに當てて居る状態であつた。これに就いての正確な知識を得る爲めには先づ第一に新大陸よりの金銀輸入額を知らねばならない。この資料は例へば Seville の Archivo General de Indias に存する當時の公文書である。然るに從來この貿易局の記録は利用せられること極めて尠かつた。恐らく近時西班牙語以外の文献に於いては、前掲ヘリソグ教授の論文と著作、及びアッシュア教授の論文(前掲拙稿参照)を數へ得るだけであらう。従つて吾々の有する知識の間隙を埋める爲めにも、この原資料の徹底的調査による本書の公刊は益するところ甚だ多しと云はねばならないのである。しかのみならず、本書の爲めに利用した資料はひとり右の Seville の文書館に在るもののみではない。Leónの高原から地中海沿岸、或は Extremadura の平原からビレネ山麓に亘る幾多の都市の文書館に、ハミルトン教授夫妻は足を向けたのであつた。まさに本書は足で書かれた著作といふことさへも出来るであらう。しかもその結果得られた結論は極めて簡單

なものでしかない。このことはこの種の研究の常道であつて何等異とするに足りないが、然し同じく經濟史の分野に於いて僅かながらもその勞の大にして得るところの尠きことを知る私にとつては、この原資料探訪による著作といふことだけでも本書に多大の價値を附したいと思ふ位である。

本書は二部に分たれて居る。第一部は金銀輸入額と金・銀・銅貨の變動を取り扱ひ、第二部は價格革命の經過、影響、原因を説く。本文中に挿入の統計表三十、圖表二十、附録として物價及び貨銀、銀價の指數表約百頁、他に二十頁の文献目錄を附す。以下本書の主なる箇所を若干紹介しよう。

西班牙及び新大陸に於ける地金輸送並びに取扱ひの制度の消長を説いた後、ハミルトン教授は一五〇三——一六六〇年に西班牙に輸入された金銀額を推定する。記録に基けばそれは總額四四七、八二〇、九三二ペソ(一ペソ＝四五〇マラヴェデー)純銀四二・二九グラム、内譯、金一八一、三三三、一八〇グラム、銀一六、八八六、八一五、三〇三グラム、即ち從來唱へられた推定最低額の約半分である。この外に密輸された金銀の在ることは勿論であるが、然しその數字は求むべくもなく、從來それは登録額の一割乃至五割の間に推定されて來たが、ハミルトン教授によれば一割説を以つて眞實に近いものといふ。但しその理由が明かにされて居ないのは遺憾である。

扱てその額は從來の通説の半ばの大きさであつても、尙新大陸よりの貴金屬流入額の尨大なりしことは否むを得ない。これによつて齎らされた結果たるものに、貨幣制度の改變、金銀比價の變動がある。そして合法的に輸入された貴金屬は先づ Caspe を通過したが故に、この王國に於ける金銀の市場比價の變動は最も大なる動きを見せて居る。ハミルトン教授に據れば A. Soetbeer: Edelmetall-Produktion, S. 55, 60, 63-4, 69-70 u. 126-7 及び一五八〇年以後新大陸の金生産率は安定を保つたとの見解に基いて、一六二二——一六六〇年間の西歐に於ける金銀鑄造比價の高

騰なる現象を需要の側から説明してゐるのは誤つて居るのであつて、供給の側から、即ちこの期間に於ける新大陸の金産額の相対的減少・銀産額の絶對的及び相對的増大から説明されねばならない。いま金銀比價の動きを示せば左の如くである。

Castile		Valencia	
法定比價	市場比價	法定比價	市場比價
一四九七—一五三六年	一・一〇・一一	一五〇一—一五二一年	一・一一・四三
一五三七—一五六五年	一・一〇・六一	一五二二—一五四三年	一・九・三五
一五六六—一六〇八年	一・一三・一一	一五四四—一五四六年	一・一〇・四三
一六〇九—一六四二年	一・一三・三三	一五四七—一五五五年	一・一〇・〇九
一六四三—一六五〇年	一・一五・四五	一五六六—一五六〇年	一・一〇・〇九
		一五六一—一五七〇年	一・一〇・〇九
		一五七一—一五九〇年	一・一〇・〇九
		一五九一—一六〇〇年	一・一〇・〇九
		一六一一—一六一三年	一・一〇・四八
		一六一四—一六三一年	一・一〇・四八
		一六三二—一六五〇年	一・一七・二二
			一・一七・二二
			一・一四・四二

斯くの如くCastileに於ける法定比價は一世紀半の間に約五〇%高騰して居り、爾後約二世紀に亘つてこの數字は維持されて居た。

* 一六四三年一月十三日に定められた鑄造比價は一・一四・八四であるが、これは二ヶ月後に廢止された過渡的なものであり、又、實際に及ぼせる影響疑はしき故に本表には省略してある。

** この期間に金貨は鑄造せられなかつたのであるから、この數字は推定。

又 Valencia に於ては Castile に比して一五三二年までは金を、その後は一五四四—一四六年及び一五五六—一六

五年間を除いて銀を過評價して居り、Castile や殆どすべての歐羅巴貨幣制度に於けるよりも、銀の鑄造價格をその低下する市場價值に調節せしめるのに後れて居る。以上の金銀比價の問題に附隨して、Castile に於ける貨幣制度の變遷、即ち先づ第一に金銀貨幣史、次いで補助貨ヴェロン(銅貨)・インフレーション史をそれぞれの時期の西班牙政治・社會・經濟狀態を背景として詳細に説き、更に Valencia の貨幣史、及びこれと Castile の貨幣との交錯を述べて居る。

本書第二部價格革命を述べるに際して、ハミルトン教授は先づその採訪せる資料の種類・性質を述べ、次にその採れる方法を語る。言語・習俗・衣服・經濟を差別付ける三事情、即ち廣大な地域・氣候及び諸資源の差異・イベリア半島の山岳多きこと、國內水路の少きこと、Andalusia 特に Seville が合法的に歐羅巴に流入せるメキシコ及びベルウの銀の目的地點たること等に據り、陸上交通の遲滞且つ高價にして諸地方間の交易比較的未發達であつた一五〇一—一六五〇年の西班牙物價の研究には、これを地域的に分離して考察することが望ましい故に、教授は四大地方、即ち Andalusia, New Castile, Old Castile-Leon, Valencia なるそれぞれ地理的境界を持つ自然的經濟單位に分つ。一五〇一—一五〇年、一五五一—一六〇〇年、一六〇一—一五〇年の三曆年間に分つた物價及び貨銀指數作製の爲めに教授の採つたのは單純算術平均であり、——これはその操作が容易なると、貨幣の購買力の變動の測定に適當せる手段だとに基く(Cf. W. C. Mitchell: The Making and Using of Index Numbers, in: Bulletin of the U. S. Bureau of Labor Statistics, No. 284, pp. 63, 71, 76-8.)——そして偏倚を少からしむる爲めに各期間の真中の十年間の平均値を基準として居る。そして全體から見てここに作製された指數の缺陷とするところは、織物價格についての十分な資料の見出し得なかつた點であると教授は自ら告げて居る。

次いで度量衡單位とその地方的相違とが示される。特に Castile と Valencia とに於ける差異は大である。先づ Castile に於いて、ムウア人の征服以降生じた度量衡制度の混乱、アルフォンソ十世以來の改革の試みの様々を述べ、製造加工業無く外國人技師に依倚せる西班牙に於いて殊に一六五〇年以前に該制度の完備は望まれべくもなかつたと云ふ。Castile と異り Valencia の度量衡單位は、その境域を越えて全西班牙の標準たるべき資格を與へられることもなかつたし、十六、七世紀に於いて Valencia のコルテス(身分議會)の開かれること多くなかつた爲め、該制度改革の論議せられる機會もなかつた。元來この地方は西班牙全土のうちで從來研究されること最も尠き場所であつた。これはハミルトンの見解によれば Valencia に於いては外國貿易よりも國內交易にその主力を注いだ爲めであつたのである。これ等兩地方の度量衡は如何なる名稱と内容とを持つたものであつたかを次に一瞥しよう。——左表の括弧内の數字は現在のメートル法に換算した近似値である。

	Castile	Valencia
Arid Measures	1 fanega = 12 celemines = [55.5 liters]	1 cahiz = 6 fanegas = [201 liters]
	= 12 almudes	= 12 barchillas
	= 144 cucharas	= 48 almudes
	= 48 cuartillos	= 16 cuarterones
	= $\frac{1}{3}$ hemina	
	= $\frac{1}{4}$ carga	
	= $\frac{1}{12}$ cahiz	

Lineal Measures	1 vara = 3 pies = [0.84 meter]	1 vara = 3 pies = [0.91 meter]	
	= 2 codos	= 36 pulgadas	
	= 36 pulgadas	= 4 palmos	
	= 48 dedos	= 64 cuartos	
	= 12 palmos		
Liquid Measures	Wine	1 cántara = 8 azumbres = [16.13 liters]	1 cántara = 4 azumbres = [10.77 liters]
		= 32 cuartillos	= 32 cuartillos
	= 1 arroba	= 1 carga	
	= $\frac{1}{7}$ carga	= $\frac{1}{60}$ botra sexentena	
	= $\frac{1}{16}$ moyo		
Oil	1 arroba = 25 libras = [12.55 liters]	1 arroba = 30 pounds = [11.93 liters]	
	= 100 panillas	= $\frac{1}{12}$ carga	
	= 400 ounces	= 360 ounces	
Weights	1 pound = 16 ounces = [460.093 grams]	1 pound = 12 ounces = [355 grams]	
	= 64 cuartars	= 48 cuartars	
	= $\frac{1}{2}$ carnicera pound	= 192 adarnes	
	= $\frac{1}{4}$ arrelde	= $\frac{1}{3}$ small fish pound	
	= $\frac{1}{25}$ arroba	= $\frac{1}{2}$ large fish pound	
	= $\frac{1}{100}$ quintal	= $\frac{1}{3}$ carnicera pound	
		= $\frac{1}{30}$ arroba prima = $\frac{1}{120}$ quintal	
		= $\frac{1}{36}$ arroba grosa = $\frac{1}{144}$ quintal	

以上を前置きとしてハミルトン教授は、西班牙に於ける價格革命の経過を前記四地方の一五〇一年以降の物價指數の變動からして物語るのであるが、茲には各十年間の平均値を掲げて見よう。

Decades	Andalusia	New Castile	Old Castile-Leon	Valencia
1501—1510	76.26	82.40	83.82	83.83
1511—1520	741.9	81.04	81.62	83.08
1521—1530	...	100.12	99.3	100.51
1531—1540	121.19	109.39	102.37	105.12
1541—1550	155.10	128.52	114.62	112.72
1551—1560	72.85	68.21	78.74	78.06
1561—1570	92.48	83.41	92.96	87.32
1571—1580	98.24	100.00	99.44	99.83
1581—1590	110.14	110.26	105.53	111.79
1591—1600	121.26	118.77	121.78	124.28
1601—1610	93.24	82.36*	91.24*	98.07**
1611—1620	84.06	84.73*	84.6*	86.13**
1621—1630	99.95	100.00*	100.32*	99.83**
1631—1640	103.16	107.08*	103.85*	111.63**
1641—1650	125.47	115.98*	114.83*	112.72**

* 一六〇一—一六〇二年は銀計算により、それ以後はヴェロン計算による。

** 一六〇一—一六〇九年はカステイリア銀計算により、一六〇一—一六五〇年はヴェレンシア銀計算による。

右に據れば西班牙に於ける價格革命は十六世紀初葉に始まつたのであつた。一五二一—一三〇年に全地方に亘つて一般的高騰があり、殊に二二年はコムネロスの反亂及びゲルマニアスの戦ひの爲めに、二二年は凶作の爲めに物價は騰貴した。そしてこの最初の四半世紀間に各地方平均五一・五%の騰貴を示して居る。三一—四〇年は比較的安定を保ち、第二・四半期の終りに平均指數は、同期の初めに比し三七・〇%高まつて居る。そして以上の半世紀に於いて物價は一〇七・六%の騰貴を見せて居る。この十六世紀前半に於ける物價騰貴の最も著しいのは、輸入された新大陸の金銀の大部分が最初流通した Andalusia であり、次にこれと密接な通商關係のあつた New Castile である。

次に第三・四半期の騰貴率は四九・五%、第四・四半期に於いては三二・三%、そして十六世紀後半に於いては九七・七四%の騰貴である。従つて後半期に於いても、前半期と同じく物價は倍加したのであつた。それ故に一五〇一年と一六〇一年とを比するならば、地方的物價指數は平均すると四・三二倍となつて居るが、個々に見ると Andalusia に於いては五倍強、New Castile に於いては四倍強、Old Castile 及び Valencia に於いては三倍半の騰貴である。而して指數は素々絶對的物價相互の關係よりは寧ろ相對的變動を表示するものであるが、以上の數字の動きによつて、この國が山岳多く不完全な道路による陸上運輸に依倚せるにも拘らず、各地方相互間の交易は可成りの程度に行はれて居り、Medina del Campo, Medina de Rioseco, Villalón の大市は全國的中央市場として全土の卸賣物價を規制したといふことが判斷される。しかもこれ等の大市に於ける卸賣物價が小賣物價を支配するものであつたことは、都市法の規定によつても理解されるところである。

十七世紀は、本書の對象とする一五〇一—一六五〇年の全期間に於ける四地方の銀物價の最高平均を以つて始

まるが、その後指數は劃一的に一〇年まで下向を示して居り、四地方の平均下降率は十年間に七・五%であつた。その後の十年間は輕微の上向線を描き、一六二〇年までに一・四四%高まつた。然るに二二—二五年に於けるヴェロン銅貨鑄造の老大さはこの十年間の安全を全く破つた。たゞ通貨膨脹に比較的關係なかつた Valencia 地方のみがこの五年間を通じて若干下降したに過ぎない。そしてこの第一・四半期末の四地方平均は一六〇一年よりも〇・三%低下して居る。次いで三カステリア地方の平均指數は二六、二七年の二年間に二〇・二二ポイント高騰し、それはヴェロン貨の數量が半減された二八年八月七日まで續いた。しかもこの日以後物價は下落したが、四地方平均して二二—三〇年間に指數は約二〇%高騰して居る。次の十年間に於ける注目すべき事柄は、三二—三三年の一般的下向傾向にも拘らず、二六—三〇年の Valencia レアル銀貨の増大と、Tala (銀行、但し割引を營ます)の破綻に基く金融攪亂とによる Valencia 物價の騰貴である。十七世紀の第二・四半期の平均上騰率は三八・七%、従つてこの期に於ける Castle のヴェロン・インフレション及び Valencia のレアル・インフレションに基く騰貴は、價格革命期の各四半期に於ける銀物價の激しき高騰に劣ること決して無いものであつた。然しながら尙第一・四半期に於ける安定の爲めに十七世紀前半の上騰は前世紀の各半期のそれ等よりも半分の大きさに止まつたのであつた。而して前世紀、殊にその後半に見られる地方別物價變動の相似性は、十七世紀前半にも依然として行はれ、たゞ Castle と Valencia の兩王國に於ける貨幣インフレションの相異からそれぞれの指數に差隔が生じたのであつた。しかも總じて四地方に於ける調和的現象は、大市の衰頹、西班牙の經濟的頹廢、流通媒介物の不便さにも拘らず、各地方間の交易が可成り盛であつたことを物語るものと云はねばならない。

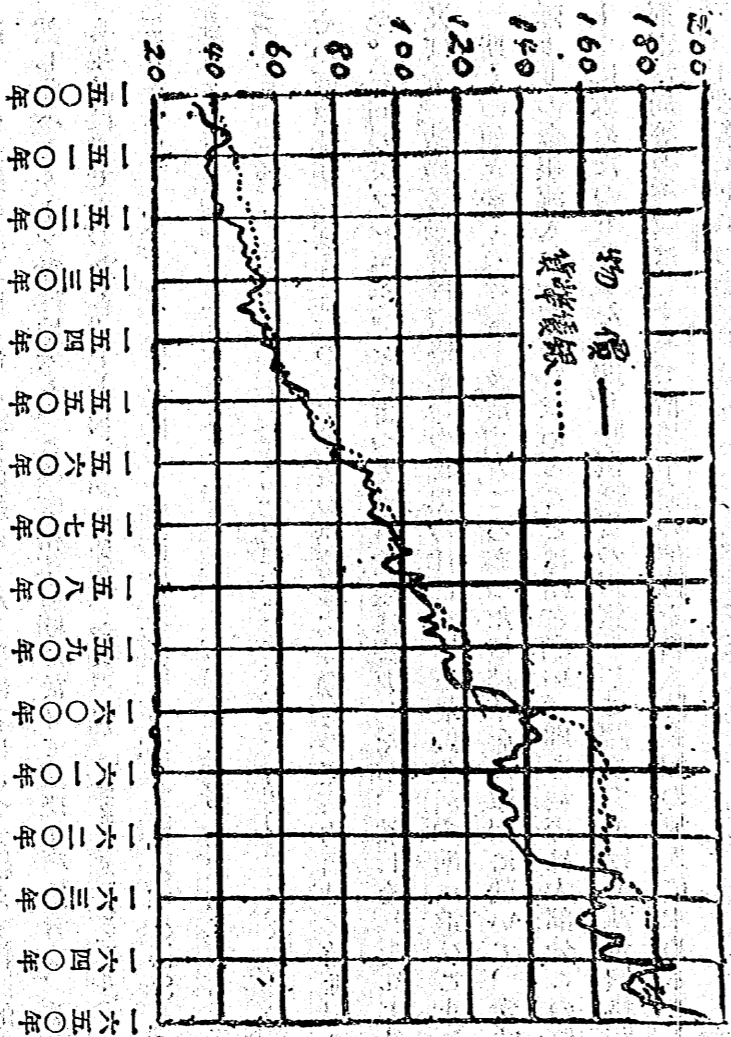
次いでハミルトン教授は各貨物を種類別にしてその變動の跡を辿り、以つて西班牙の經濟的頹廢の原因と本質と

を探る一助とせんとする。それ等は、林産物、家禽、畜産物、魚類、香料、建築材料、果實、穀物のハグルップに分たれ、それ等はそれぞれ一般物價の動向と對比され、最後に農産物價格と非農産物價格との指數が對比されて居る。前者のうちその説くところ最も詳細なのは穀物價格(大麥・米・ライ麥・小麥)であるが、魚價指數の如きは商船隊と密接に關係する西班牙漁業の盛衰を物語る點に於いて興味深いものがある。又香料價格の指數を檢してそれが一五五八—六五年に一般的高騰をなして居るのに對し、ハミルトン教授は、これが西班牙に限られた現象でなくこの説明は西班牙の經濟又は政策以外に求めねばならぬとの説——例へばヴィイベ——も信すべき理由あるものであるが、又エレンベルクの指摘する如くアントワープ取引所に於ける香料投機が價格を上下せしむる契機となり得たか否かに就いても問題にせねばならぬとして、その解答を與へて居ない。然しながらこの問題は當時に於ける葡萄牙や和蘭や英吉利の香料貿易の獨占や競争の影響を顧みねば解決を得ぬ問題であらう。次にハミルトン教授に従へば、(イ)一五〇〇—七五年の農産物價格は非農産物價格よりも可成り速かに騰貴して居るが、(ロ)その後一六二五年までは兩指數の變動は調和的であり、(ハ)その後に於いては非農産物價格が先んじて居る。(イ)は農業生産の相對的後退を語るが——従つて Konrad Häbler: Die wirtschaftliche Blüte Spaniens im 16. Jh. und ihr Verfall. S. 345. の西班牙農業が一五五〇—一六〇年に盛であつたとの説は疑はしくなる——然し諸貨物のうち輸入品が可成りの割合を占めて居る事實は、非農業指數の上騰緩和せしめ易いといはねばならない。(ハ)に於いては事態はこれと逆である。然しここに於いては、ヴェロン貶價の衝擊を十分受けたところの輸入品が多く割合を占める爲め、非農産物價格の騰貴を強めて居ると云はねばならないのである。

これ等の物價の高低の間にあつて受取られた賃銀は如何であつたかが次の問題となる。この吟味に際してハミル

トン教授は公職者の俸給・賃銀は経済的よりは政治的考慮に基き決定せられること多き故を以つてこれを除き、強制的な或は愛國心の發露よりの労働の報酬も亦これを省き、そして貨幣による報酬額のみを以つて賃銀指數を作製し現物による給與物はこれを一切含ましめなかつたのである。その二五七—一八〇年を基準年度とする貨幣賃銀指數に據れば、一五〇—一五〇年に七九・七%の高騰、一五五〇—一六〇〇年に八五・九%の高騰、一六〇〇—一五〇年に四七・七七%の高騰を示して居る。左表(一)はこの趨勢と物價との對比を示すものである。然るに雇傭の變動に關する資料を全く缺くが爲め、十六世紀の價格革命及び十七世紀第二・四半期のインフレーションによる物價騰貴が、全労働所得に及ぼせる影響を正確に判定するを得ない。たゞ西班牙は農業國であり工業は手工業的段階のものが極めて僅かに行はれたに過ぎなかつた爲め、就職度の變動は狭範圍のものであつたと推定されるが故に、労働者の貨幣所得は賃銀指數によつて度られ、これと物價指數とを以つて實質賃銀が略々量られると做して大過はないであらう。左表(二)は實質賃銀指數——貨幣賃銀指數を物價指數を以つて除せるもの——の十年間毎の平均である。——基準年度一五七一—一八〇年。

(一)



(二)

1501—1510.....	110.73
1511—1520.....	122.19
1521—1530.....	104.66
1531—1540.....	103.54
1541—1550.....	99.02
1551—1560.....	115.43
1561—1570.....	115.20
1571—1580.....	100.49
1581—1590.....	114.43
1591—1600.....	101.02
1601—1610.....	115.75
1611—1620.....	124.89
1621—1630.....	110.75
1631—1640.....	110.36
1641—1650.....	100.51

即ち十六世紀の實質賃銀指數を検するならば、當時の重商主義的觀念から見て西班牙を富ますと豫期された新大陸よりの金銀の流入は、最大社會階級のたる労働者にとって絶えず經濟的退歩せしむることになつたのである。然し尙ハミルトン教授は云ふ、この價格革命期に於いて西班牙労働者は、英吉利・佛蘭西・獨逸・波蘭のそれ等よりも生計は樂であつたと。—— Cf. D. Knoop & G. P. Jones: *Mason's wages in medieval England*, in: *Economic History*, II, 484-492.; G. Wiebe: *Geschichte der Preisrevolution*, S. 369-79.; E. J. Hamilton: *American treasure and the rise of capitalism*, in: *Economica*, Nov., 1929, 350-3.; F. Bujak: *Ceny we Lwowie w XVI i XVII Wieku*, 1928, p. 283.—— 十七世紀に至つて一六三三—一五〇年に於ける Castile のマホーン・インフレーションとその貶價及び Valencia のリアル貨の悪鑄は、労働者の經濟的福祉を前世紀の金銀流入に基くものに劣らずに害した。三回のデフレーションによつて實質賃銀は盛返したが、然しそれぞれに於ける頂點はそれに先立てる高騰點に及ばず、結局労働者は價格革命の暗黒時代に於ける最低生活水準に追ひこまれたのであつた。

斯くの如き多くの影響を及ぼすところあつた價格革命の原因に就いて、當時の西班牙の爲政家・學者から、新大陸よりの金銀流入なる解答を求めることは殆ど難し。即ち彼等は大部分この原因を幣制——例へばヴェロン貶價——に求めたのであつた。即ち物價騰貴の對策として關稅引上げや法定價格制定等に努めたコルテス・官廳・王室・都市當局等の施政は、すべて價格革命の原因を新大陸金銀の流入に求めること無きものであつた。これと同じく十六・七世紀の西班牙經濟學者、例へば Cristóbal de Villalón, Lúís de Alcalá, Francisco García, Tomás de Mercado, Alfonso de Morgado, Fernando del Pulgar, Lope de Deza, Miguel Casa de Lervela の如きも、すべて貨幣數量と購買者數との相關關係に、ヴェロンの推移に、商人の買占に、新大陸に於ける需要増大に、或は農業の衰頽に、

メスタの保護撤去等々にその主因を求めて居る。勿論新大陸の鑛山發見に言及するものも無くはなかつたが、然しそれが論ぜられることは最も後に於いてであり又最も尠かつたのであつた。一五五八年に Francisco López de Gomara が、物價變動は新大陸より流入する多量金銀に負ふと云つて居るが、彼はこの論題につきすゝめることをしなかつた。然しこの程度のものならば彼以前にもこれを求めることが出来、しかも彼の書が廣く言論界に影響を與へるところあつたかは疑はしむべきはなからざる。Roger B. Merriman (ed.); *Gomara's Annals of the Emperor Charles V*, 1912, pp. XXXIX-XL. 曰はれば Gomara の書を利用せる著者は僅かに四人、そのうち一六五〇年前にその著書を公けにしたものは Prodencio Sandoval であるのみである。しかも Sandoval は新大陸の金銀を以て物價騰貴の理論的要因となし、十六世紀後半の騰貴原因は衣服・家屋の奢侈・虚飾及び婦人の怠惰に依ると做して居る。従つてハミルトン教授は、獨自的に價格革命の主因を新大陸の鑛山に求めこれを周到に分析した最初のものとして Jean Bodin: *Response au Paradoxe de Malesheroit Touchant l'Encheissement de Toutes Choses*, 1568. を擧げる。従來 Noël du Fail を以つて新大陸の金銀と歐羅巴物價との相關關係を論じた最初の人であると做されたことは——例へば A. E. Monroe, *Monetary theory before Adam Smith*, 1923, p. 56.——ハミルトン教授の檢索せしところによれば誤りであつて、彼がこの相關關係を述べたのは一五八五年のことであつた。而して西班牙經濟學者にしてこの關係を論じた最初の人は Martín González de Colorigo (1600) であるが彼はボタンを引用して居り、その後一六五〇年までに Sancho de Moncada (1619), Pedro Fernández Navarrete, Diego Saavedra Fajardo 等が現はれたが、Moncada はボタンを、後二者は Moncada の影響を受けて居ることが明かである。しかも Colorigo と Navarrete とを除くでは、すべてのこの問題を數行で片付けて居る有様であつた。

斯くの如く爲政者や學者がこの關係を看過した理由は奈邊に存するか。當時の消費者は高物價の意義を把握して居り生産者は高物價が輸出を阻害することを理解して居り、僅かに重商主義者のみが容易に上記の諸弊害を醸した物價騰貴を金銀の蓄積に歸せしめ得なかつたのである。従つてこの問題に對する論議の尠かつたことは、諸人にとつて明白なことを敷衍するを避けんとしたが爲めに生じたのであつて、西班牙重商主義者は實用論者たりし爲め、その奉ずる原理に適合せる對策にして達成し得ると考へられたものみの原因にその注意を注いだのであつた。既述の如く十六世紀以降の物價騰貴が最初にそして最大に Andalusia に起り、次位を New Castile が占めて居ることとは騰貴原因が新大陸との交易に關聯あることを示す。そして銀行業の發達と新大陸貿易の周期的性質とより生じた信用賦與の増加、貿易船準備の爲めの・及び食料生産に従事せず海外へと志す増大する移民の準備の爲めの需要は、當然又この兩地方の物價を騰めたのであつた。勿論 Valladolid が政治的首府であり、メスタの移住や、前記三大市の強大なりしこと等は、新大陸金銀の Old Castile 移入を容易にした。然し Castile と關稅障壁や正貨輸出禁止やによつて經濟的に隔離された Valencia に於ける、並びに十六世紀初葉の英吉利・佛蘭西・獨逸・北部伊太利に於ける物價騰貴は、近世資本主義の勃興に伴へる商業・金融信用の擴大や十五世紀第四・四半期の獨逸銀鑛の産額増加の如き、新大陸發見によつて生じたのではない諸力が、西班牙に於ける價格革命に端緒的刺戟を與へたものであることを示すであらう。而して十六世紀殊に一五三五年以降に於ける金銀輸入額の増加と物價騰貴との交互關係の密接なことは、アメリカの豊富なる鑛山が西班牙價格革命の主因なることを示すものであることを疑ひ得ない。たゞ植民地よりの需要、信用擴大、獨逸銀鑛の産額増加等が顯はになつた十六世紀初頭、及び惡疫流行しヴェロンの貨の發行過大が行はれた十六世紀末葉に於いてのみ、物價騰貴に他の諸要素が介入したのであつた。然しながら

貴金屬の貯藏量の増大と物價騰貴とが歩調を合はせるものでないことに留意せねばならない。死藏されたそれ等が物價に影響を及ぼすこと無きは當然である。教會の裝飾に用ゐられた金銀の多量、希望峰航路の發見以後に於ける金銀の東洋流出の増大、それ等にも拘らず貨幣に鑄造せらるべき部分は増大したが、然し貨幣經濟の發達は金貨の急速な増加の影響を相殺すること可成り大であつた。ハミルトン教授の檢索せるところに據れば、十七世紀前半の經濟書やコルテスに於いて西班牙農工商業の退歩に歎聲を放つて居るものは極めて多い。事實産業の衰頽は始まつて居たのである。然しこの真相を反映しての彼等の言説であるかは疑しく、又、西班牙の政治的霸權の喪失を經濟的沈滞と混同するものが多いことは注意せねばならない。更に一六〇九年のムウア人の放逐が悲惨なる經濟的結果を生んだとの説は、これが行はれてから十年以上に亘つて、ムウア人の産せる貨物の大部分の價格が安定して居ることから見ても、この宗教的迫害を以つて西班牙經濟頹廢の主因となすを得ないことを語るとハミルトン教授は云ふ。そして教授は Andalusia 及び兩 Castile に於ける農工業の衰頽、人口の減退、ヴェロン・インフレーションの進行を以つてこれ等地方の物價騰貴の主因なりとし、Valencia ヴェロンの過度發行及び財貨生産・交換の減退を以つて同地方に於ける物價騰貴の主因と做して居るのである。

以上要約した本書の價值は、少くとも私が認むる限りに於いては本稿の最初に述べた通りのものである。更に従來行はれ來つた多くの推斷に對して是正を施したことも亦本書の有する價值の一つであらう。これに關しては、既述せるところの外に次の如きものがある。

Roger B. Merriman: Rise of the Spanish Empire. Vol. III. 1925. pp. 32, n. 1, 124, 199-200. は「一五四〇年以前に物價の一般的騰貴無く、たゞチャアルス五世治下に於いて宮廷が諸處にその場所を轉ずるに従ひそれぞれ

の場所に於ける物價は騰貴したと論じて居るが、既掲の地方別指數からハミルトン教授は、物價騰貴と使費多きブルゲンデ、宮廷の偏歴との間に關係付けを見出し得ないのであつて、十六世紀前半に屢、宮廷の所在地となつた Old Castile-Leon の物價が、宮廷の移さるること殆どなかつた Andalusia & New Castile の物價より可成り下廻つて居ることは、メリマン教授の説を覆すものであると論ずる。

又、Georg Wiebe: Geschichte der Preisrevolution. 1895. S. 369-79, 325-66. の作製せる指數は Vicomte d'Avenel, Thorold Rogers 等々の統計に基くものであるが、一四五——一五〇〇年を基準年度とするが故に、物價騰貴を誇張する傾きを持つ。加ふるにヴィイイは十六世紀を通じて貨幣品位は貶減したとの印象を抱いて勞作したが故に、十六世紀の西班牙物價の騰貴を過少評價する結果を生んだ。勿論彼は、價格革命は歐羅巴各國の中で西班牙に於いて最も甚しかつたと推斷して居る。然し斯く彼の指すのはその初期段階に對してであつて、その後の時期を通じてこれを押しなべて云へば、西班牙物價の騰貴は、佛蘭西・獨逸に於けると大差なく、恐らく英吉利に於けるよりは程度少かつたであらうと推測して居るのである。これに對してハミルトン教授は、その作製せる物價指數からして、佛蘭西・英吉利・北部伊太利・獨逸に於いてその然らざることを説いて居る。たゞ近世資本主義の搖籃の一つであつた低地諸邦の指數が存在せざるが故に、これを明かにするを得ないが、この地と通商關係密接なりしミューンスタアの指數から見れば、ここに於いても亦西班牙物價の騰貴率の方が大である。要するに物價史の今後の研究によつて數字上に若干の訂正は必要となるであらうが、然し十六・七世紀の歐羅巴諸國を通じて、一五〇——一六〇〇年の西班牙の如く騰貴した國はないことは確かであらうと教授は云ふ。然しこれは私の望蜀の念かもしれないが、當時貴金屬の世界市場たりしネデルラントの研究は、ハミルトン教授の論斷を裏書きする最も有力な手段である

が故に、これの完成は待望さるべきであらう。それと相俟つて、教授の企劃されて居る American Treasure and the Rise of Capitalism. なる新著の公刊の日の早きことを祈つて、私は長きに亘つたこの紹介の筆を擱く。